

ゆかなと待ちに待った海水浴

著者…なかひろ



「待ちに待った海水浴だー！ やっぱー！」

妹のゆかなが、広大な海を前にはしやがながら大声を上げる。山と遠うので、こどもが返ってくることはないのだが。

ともあれ、俺たちは夏休みを利用して遠出のデパートを楽しんでいる。天気も晴れてくれだし、絶好の海水浴日和だ。

「前に来たときよりも、清々しい気分かもー 解放的ー！」

ゆかなの口からこんな言葉が出るのは、長年苦しんでいた水恐怖症を克服したからだ。

その苦勞を思うと、俺は感慨深くなる。

「今日のために、新しい水着買ったんだよ。お兄ちゃん、どうかな？」

「かわいいよ。」

ボーズまで取っているゆかなに、俺は正直に答える。まあ、かわいいのも本音だが、はち切れんばかりの胸が気になってしょうがない。ビキニが外れないか冷や冷やする。

「お兄ちゃんが、あたしの胸ばかり見ている……」

視線でバシてるっ。

「お兄ちゃんの妹おっぱい星人！」

「なにが悪い！」

「聞き直された……」

「もう一回聞け。妹のおっぱいが大好きな兄がいて、なにが悪い！」

「えへへ……ぜんぜん悪くない」

ゆかなは恥じらいつつも、まんざらでもなさそうに答える。会話だけ聞いていたら、まじうことなきバカっぱだ。

「お兄ちゃん……手、つないでもいいかな？」

海に入る前に、ゆかなはそう提案する。断る理由なんてない。

俺たちは手と手を取り合いながら、海に向かって歩く。ゆかなは海に入った経験がほとんどない。それもやっぱ、水に対する恐怖心があったからだ。

ゆかなの手は震えていて、海辺に近づくとつれ、俺の手を握る力が強くなる。

「大丈夫、怖くないよ、ゆかな」

「うん……お兄ちゃんと一緒にだもん」

そしてゆかなは、一歩を踏み出した。

「冷たい……でも、気持ちいい！」

ゆかなは海に入っても、笑顔を見せてくれた。俺も自然と頬がゆるむ。

「お兄ちゃん、あたし、海に入るだけじゃなくて、泳いでみたい！」

「ああ、そうしよう。俺が手を引くよ」

これまでずっとカサブチだったゆかなは、プールで泳ぎの練習をした。そのときも俺は、こんなふうな手を引いていた。

「わあ……あたし、ちゃんと泳いで泳いでる！」

ゆかなはもともと運動神経が良いほうだし、恐怖心に打ち勝った今となっては俺が手を引かなくても泳げるだろう。だけど、ゆかなは俺の手を離さない。

「一人で泳ぐより、こっちはほうが好きだから……えへへ」

そのとき、大きな波が俺たちを襲った。頭から海水をかぶってしまった。

「び、びっくりしたあ……」

「ゆかな、大丈夫か？」

プールとは違い、海にはこういったアクシデントもある。ゆかながまた水を怖がらないかと、焦ってしまふ。

「うん、大丈夫。お兄ちゃんが手をつないでくれたおかげで、怖くなかったよ……あつ」

ゆかなはまた朝狂な声を上げると、急に俺に抱きついてきた。

「お、お兄ちゃん、見ちゃダメっ！」

どうも、水着が波にさらわれたようだ。はち切れんばかりだったし、無理もない。

ゆかなは今、胸を視界から隠すために抱きついていて、代わりに感極まのうがじかに伝わってくる。俺はなるべく平常心を装って、水面に浮かんでいた水着を回収した。

「ほら、ゆかな。水着をつけ直そう。誰かに見られないように、俺が守ってやるから」

「えへへ……お兄ちゃん、頼もしい」

きつと俺たちは、兄妹であるにも関わらず、恋人同士のような雰囲気を作っている。それが良いか悪いかなんて論じるつもりはない。

なにより大切なのは、俺たちふたりの気持ちなのだから。